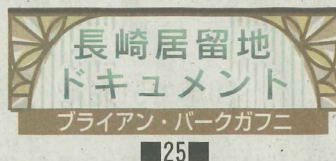


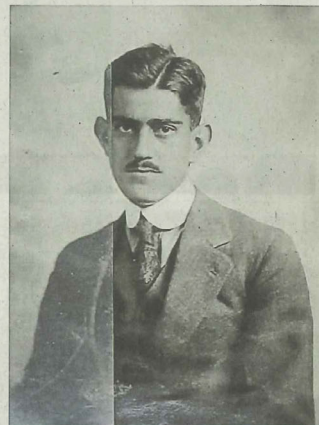
移転を繰り返した80年



長崎米國領事館

安政五方国条約締結後、タウンゼント・ハリス駐日米國総領事は安政6(1859)年に長崎を訪れ、アメリカ商人のジョン・G・ウォルシュを初代長崎米國領事に任命した。ウォルシュは広馬場の日本家屋で領事館を仮設したが、大浦地区の埋め立て工事が終わると、長崎港を一望できる東山手12番地に大きな洋風住宅を建て、ここに領事館は明治9(1876)年に東山手7番地に移転し、同14(1881)年には退役陸軍士官のアレクサンダー・ジョンズが領事に就任した。南北戦争中、ロバート・E・リー將軍率いる南軍で少佐を務めた経歴を持つ彼は、領事館を再び南山手7番館に移し、以後8年間そこにどまることになる。

日米協力促すも開戦前に閉鎖



アーウィン・C・コレルは、明治26(1893)年に長崎で生まれ、大正期に駐長崎米國副領事を務めた(米國国立公文書館蔵)

ヨーンズが領事に就任した。南北戦争中、ロバート・E・リー將軍率いる南軍で少佐を務めた経歴を持つ彼は、領事館を再び南山手7番館に移し、以後8年間そこにどまることになる。

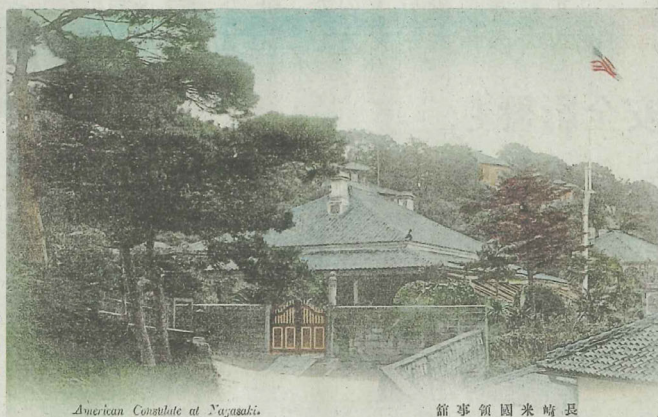
明治23(1890)年、ウィリアム・アバクロンビーというニューヨーク出身の医師が米國領事として来崎。その年の夏、長崎はコレラの流行に見舞われ、アバクロンビー領事はこの街の不健康な環境に不満を漏らしながら、同26(1893)年に南山手14番地の石造りバンガロー(国指定重要文化財旧オルト住宅)に領事館と自宅を移した。

その5年後、チャールズ・ハリスが妻と娘を連れて来崎し、アバクロンビーの後を継いだ。ハリス領事は米國政府に手紙を送り、南山手の領事館に対して次のように不快感を示した。「深刻な問題点は、この住宅が石造りで非常に古く、建てられてから一度も高温多湿な気候の中で乾いたことがなく、高い丘の陰に位置しているため、湿った状態が続き、事務所を構えるにも住むにも不健康な場所である」

ハリス領事は領事館を海岸通りの大浦4番地に一時的に移したが、米國人宣教師の住居として使われていた東山手12番地の由緒ある住宅に再移転させることにした。その後20年間、前庭の旗竿から星条旗が掲揚され、木々に囲まれた領事館の絵のような風景は、多くの写真や絵葉書に登場する。駐長崎米國領事の中には、長崎で生まれ、小説「蝶々夫人」の原作者ジョン・ルーサー・ロングのおに当たるアーウィン・C・コレルもいた。

大正10(1921)年、領事館は大浦5番地の旧ジャードン・マセソン商会事務所に移転し、日米協力の促進を続けた。この威風堂々の洋風建築は、長崎英國領事館に隣接して大浦海岸通りにたたずんでいたが、太平洋戦争前後に目隠し倉庫の建設によつて港の眺望が遮られた。最後の駐長崎米國領事アーサー・F・タワースは、昭和16(1941)年夏に領事館を閉鎖して神戸経由で日本を離れるのであった。

(グラバー園芝園長) 月1回掲載します



American Consulate at Nagasaki

館事領國米崎長



正面から見た大浦5番地の旧長崎米國領事館。戦後の写真。建物は解体されるまで長崎聖二教会として使用された。その後、敷地の後半部分に新しい教会が建てられ現在に至る(米國国立公文書館蔵)

大正期の絵葉書に見る東山手12番地の長崎米國領事館(筆墨蔵)